

し送りを終わり、二段に仕切られた階下の船倉に降り、休養のために横になった途端、大音響と振動が伝わり、同時に停電した。咄嗟(とっさ)に、私は、敵潜水艦の魚雷が崎戸丸に命中し、爆発したものと判断したので、遭難演習時の訓練どおりの動作を、暗黒の中で素早く実行した。まず、救命胴衣を身につけ、軍刀・拳銃・実包・乾パン・鏢節・マラリア予防薬を携行して甲板に駆け上がった。甲板に上がって驚いたことは、崎戸丸に大きな船が横付けしていることであった。

大波が打ち寄せる度に両船は激突し、甲板の手摺りその他の構造物が大きな音を立てて壊れていた。その光景を見た私は、てっきり、崎戸丸が雷撃を受けたので、僚船が救援に来たのに違いないと思った。ところ

が間もなく、現場が護衛駆逐艦から探照灯の照射を受けて明るくなり、両船の船長の拡声器による質疑応答等によつて、次第に状況が明白となった。崎戸丸に衝突した上海丸は船体が真つ二つとなり、後半部は衝突後急速に海没し、その姿を見ることができなかつた。前半部は崎戸丸に凭(もた)れかかるような状態で徐々に海中に没しつつかつた。

近くの海面には、上海丸を脱出した邦人と船員が、荒波に揉まれながら、親は子の、子は親の身を案じて、大声で励まし合っている様を見ながら施す術もなかつた。

崎戸丸の将兵と船員は、上海丸の前半部が接近する度に、船倉の上部を被うための板を両船の間に渡して、上海丸の邦人の救出に当たつた。敏速なこの活動によつて、上海丸の

引き揚げ邦人四百名を崎戸丸に移乗させることができた。しかし、この救出活動中、誠に不幸な椿事(ちんじ)が発生した。引き揚げ邦人の中に、生後間もない乳飲み子を抱いた母親が、船と船との間に渡された板を渡ろうとして、崎戸丸の兵隊が差しのべた手を掴(つか)んだ際、グイと手を引つ張られたため、乳飲み子を海面に落としたのである。母親は、半狂乱状態となり、舷側から海面に飛び込もうとしたが兵隊に抱き止められて船室に連れて行かれた。

崎戸丸に凭(もた)れていた上海丸の後半部は次第に離れ始めた。崎戸丸の船長は上海丸の船長に対して拡声器で「本船を離すぞう」との呼びかけたのに対し、上海丸の船長は、「しばらく待ってくれ」と頼んだ後、「上海丸の船員は直ちに本船か